龍谷大学佛教学研究室年報 24号 2020年3月

説一切有部の形色実有説について

―衆賢の『順正理論』における形色の存在証明を中心に―

劉 婷婷

はじめに

本研究は世親（Vasubandhu）の『阿毘達磨倶舎論』（*Abhidharmakośabhāṣya*：AKBh）の説に対して衆賢（Saṃghabhadra）の『阿毘達磨順正理論』（**Nyāyānusāriṇī*）で主張する形色（saṃsthāna）が如何なるものであり、それが存在する証拠は何であるのかを解明するものである。

AKBhは全9章より構成され、説一切有部（以下、有部）の伝統説である『阿毘達磨大毘婆沙論』（**Abhidharmamahāvibhāṣāśāstra*）などの綱要を示しつつも経量部（以下、経部）などの立場を借りた独自の批判を加えている。そのうち、AKBh.IV「業品」において、まず業は思業（cetanā karma）と意思によって作られた思已業（cetayitvā karma）の二業として立てられ、このうち思已業はさらに身・語の二業に分かれ、思業は名称を変え、身業・語業・意業の三業が立てられる[1]。また、身・語の二業はさらに表と無表に分類され[2]、身表業・身無表業・語表業・語無表業・意業

---

[1] AKBh.IV [Pr: 192.6-10, D:166a4-5, P: 190a7-8]
kiṃ punas tat karmety āha /
cetanā tatkṛtaṃ ca tat // IV.1b //
sūtra uktaṃ / dve karmaṇī cetanā karma cetayitvā ceti / yat tac cetayitvā cetanākṛtaṃ ca tat /
te ete dve karmaṇī trīṇi bhavanti / kāyavāṅmanaskarmāṇi /
それでは、その業は何であるかと〔言われれば〕、
意思とそれ（意思）によって作られたものがそれ（業）である。（IV.1b）
と説かれた。『〔中阿含〕経』（Cf.『中阿含經』（――）「達梵行經」[T: 1.600a23-24]）は「二種の業は、思業と思已〔業〕である。」と説く。そして、意思によって作られたものが説かれる所の思已〔業〕である。これらの二種の業は三種になる。身・語・意の三業である。
AKBh.IV [Pr: 192.13-17, D: 166a7-166b1, P: 190b3-4]
tatra punaḥ
cetanā mānasaṃ karma // IV.1c //
cetanā manaskarme ti veditavyaṃ /
tajjaṃ vākkāyakarmaṇī // IV.1d //
yat tac cetanājanitaṃ cetayitvā karmety uktaṃ kāyavākkarmaṇī te veditavye /
さらに、そこ（二業と三業の関係）で、
意思は意に関する業である。（IV.1c）
意思は意業であると知られるべきである。
それ（意思）より生じたものが、語・身の二業である。（IV.1d）
身・語の二業はその意思によって生じる思已業と言われるものであると知られるべきである。
[2] AKBh.IV [Pr: 192.18-19, D: 166b1, P: 190b4-5]
te tu vijñaptyavijñaptī // IV.2a //

という五業となる。そのうち、有部は心の力によって身にそれぞれの場合に応じて起こる形色が身表であるといい、身表業の本質[3]は形色であるとする[4]。また、意業の本質は意思であり[5]、語表業の本質は言声とする[6]。これに対して、AKBh における経部は身・語・意の三業の本質を全て意思であるとし、さらに、有部の身表形色説に対して経部は身表の本質は形色であることを認めるが、この形色は仮有であって、実有ではないと批判する[7]。そのため、身表も仮有であるとして、

---

te tu kāyavākkarmaṇī pratyekaṃ vijñaptyavijñaptisvabhāve veditavye //

しかしながら、それら二つのもの（身・語二業）には、表・無表がある。(IV.2a)

しかしながら、それらの身・語二業は、それぞれが表と無表を自性とすると知るべきである。

[3] AKBh では、自性（svabhāva）や本性（ātma）などの語によって業などの体が示されている。また、後述するように、三業のそれぞれの性質としても自性（svabhāva）が用いられている。そのため、体を示す場合は、本文では自性（svabhāva）や本性（ātmika）などの語を本質と表現する。

[4] AKBh.I [Pr: 6.18-19, D: 166b1, P: 190b4-5]

asti saṃsthānato na varṇataḥ / dīrghādīnāṃ pradeśaḥ kāyavijñaptisvabhāvaḥ /

形色としては存在するけれども顕色としては〔存在し〕無い〔色処が〕あり、長などの一部分で、身表〔業〕を自性とするものである。

AKBh.IV [Pr: 192.19-21, D: 166b1-2, P: 190b5]

tatra tu /

kāyavijñaptir iṣyate saṃsthānaṃ // IV.2bc //

cittavaśena kāyasya tathā tathā saṃsthānaṃ kāyavijñaptiḥ /

しかし、その中で、

身表は形色であると認められる。(IV.2.bc)

心の力によって、身にそれぞれの場合に応じて〔起こる〕形色が身表である。

Cf. KSP [M: 1.13-18, D: 134b4-5, P: 156a8-156b1]

de la 'dir 'di dpyad par bya ste/ mam pa rig byed ces bya ba'i chos de gang yin / re zhig lus kyi mam par rig byed ni dbyibs yin te / de la dmigs pa'i sems las skyes pa yin no // gang gi dbyibs yin / lus kyi yin no //

そのうち、以下ではこれ（表）について吟味すべきであって、表というその法は何であるのか。先ず、身表は形色であって、それ（身）を所縁とする心より生じるものである。何の形色であるのか。身のもの（形色）である。

[5] Cf. 注 1。

[6] AKBh.IV [Pr: 196.1-4, D: 169a1-2, P: 193b4-5]

dravyam eva tu saṃsthānaṃ vaibhāṣikā varṇayanti saṃsthānātmikāṃ tu kāyavijñaptiṃ /

vāgvijñaptis tu vāgdhvaniḥ // IV.3d //

vāksvabhāvo yaḥ śabdaḥ saiva vāgvijñaptiḥ /

けれども、毘婆沙師たちは、「形色こそが実体であり、そして、身表は形色を本性とするものである。」と説明する。

けれども、語表〔の自性は〕語たる音声である。(IV-3d)

語を自性とする声そのものが語表である。

[7] AKBh.IV [Pr: 195.15-21, D: 168b2-5, P: 193a5-193b1]

athedānīṃ kāyasya garti nirākṛtya saṃsthānaṃ ca tatra bhavantaḥ sautrāntikāḥ kāṃ kāyavijñāptiṃ prajñapayanti / saṃsthānam eva hi te kāyavijñapti prajñapayanti / na tu punar dravyataḥ /

tāṃ ca pajñapayantaḥ kathaṃ kāyakarma prajñapayanti /

kāyādhiṣṭhānaṃ karma kāyakarma yā cetanā kāyasya tatra tatra praṇetrī / evaṃ vāṅmanaskarmaṇī api yathāyogaṃ veditavye / yat tarhi cetanā karma cetayitvā cety uktaṃ /

saṃkalpacetanā pūrvaṃ bhavaty evaṃ caivaṃ ca kariṣyāmīti / tathā cetayitvā paścāt kriyācetanotpadyate / yayā kāyaḥ preryate sāsau cetayitvā karmety ucyate /

【有部】ではこの場合、〔身表が〕動きであることを拒否して、形色であることも〔拒否して〕、彼ら経部の人々は、何を身表と仮に立てられるか。

【経部】実に彼ら（経部の人々）は形色が身表と仮に立てられるけれども、それ以上に、実体〔として立てるの〕ではない。

【有部】では、それ（身表）を仮に立てたら、身業を如何にして立てられるか。

有部が立てた身表業を認めない。経部が主張するように形色が仮有であれば、有部の業説の整合性が崩れるため、そのAKBhの世親の説に対して、衆賢は『順正理論』・『阿毘達磨藏顯宗論』で反駁する。

衆賢は『順正理論』「辯本事品」において、AKBh.I「界品」で説かれたような長などの8種の形色の一部分が身表業であるという身表形色説を言わず、ただ身表業の本質が形色であることを認めている[8]。そのため、具体的な身表業としての形色が如何なるものか示されないという問題がある。しかし、同論の「辯業品」において、認識論に基づいて長・短等と形色とを区別し、長・短等は意識を伴って認識される仮有なものとし、長・短等を成立させる根源的な物質を形色であるとしてその実有であることを証明しようとする。さらに、長・短等の認識と形色の認識とも区別し、長・短等の認識は顕色の認識と異なり、単に眼で認識するのではなく、意識の判断によって認識するものであると主張し、形色は意識を伴わない無分別の眼識によって認識されるのであると主張する。ここで、衆賢の形色実有説は当然経部の形色仮有説と異なっており、長・短等と形色とを区別するという点はAKBhで説かれた有部の従来説ともやや異なっており、衆賢独自の説を主張している。

衆賢の形色実有説は主に①認識論及び②存在論という2つの視点より展開される。本稿では、AKBh.IV、AKVyにおける有部の主張と経部の批判を確認し、『順正理論』・『顯宗論』に示される説、及びAKBhの安慧釈（**Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma*：TA）・満増釈（**Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusarīṇī nāma*：LA）での衆賢の説への言及を基に、衆賢の形色実有説への認識論による論証を考察する。

【経部】身業とは身を基盤とする業であり、身をそれぞれの場合に引き動かせる意思である。このように語業・意業も理に応じて知られるべきである。
【有部】もしそうであるならば、「〔業は〕思業及び思已業とである」と説かれたのは〔どうなのか〕。
【経部】「このようにこのように行なおう」という意志〔的〕な意思（saṃkalpacetanā）が先にあり、そのように意思しおわった後、働かせる意思（kriyācetanā）が生じる。そ〔の働かせる意思〕によって身を動かせる。そ〔の働かせる意思こそが〕思已業と言われる。
Cf.『倶舎論』（玄奘訳）[T: 29.68c08-c13]
既已遮遣行動及形、汝等經部宗立何爲身表。立形爲身表、但假而非實。既執但用假爲身表、復立何法爲身業耶。若業依身立爲身業、謂能種種運動身思、依身門行故名身業。語業意業隨其所應立差別名當知亦爾。
[8] 拙論［2019］pp.73-77.（90-94）。

1. 了相別により形色の存在を証明する

AKBh.IV における有部の形色実有説についての記述は経部の批判から始まる。

> 「形色は実有ではない」と経部の人々は〔言う〕。なぜなら、顕色が一方に面してより多く生じる場合に、「長（い）色である」と仮設する。それ〔先述の顕色〕と比較してより小さく〔生じる〕場合に、「短（い色）である」と〔仮設〕し、四方により大きく〔生じる〕場合に、「四角形である」と〔仮設〕し、全て〔の方向〕において等しく〔生じる〕場合に、「円である」と〔仮設〕する。このように全てが同様である。
> 例えば、松明が一方向から他の間断のない所に連続して速やかに見られる時に、「長い」と認識される。全方向に〔連続して速やかに〕見られる時に、「輪である」と〔認識される〕。しかし、形色は〔顕色とは〕別の種類ではない〔というようである〕。[9]

世親はまず認識論として、眼で見られる形色はただ顕色の様々な配列によって輪郭が現れた仮有であるとする形色仮有説を述べる。具体例としては、眼で見られる顕色が一つの方向に多く並ぶ時、「長い色」という認識が生じ、逆に少なく並ぶ時に、「短い色」という認識が生じる。方形・円形などの認識の生起についても同様である。最後に、例えとして松明が高速で移動すれば長・円等が認識されることも挙げられた。当該の AKVy では、AKBh.IV の長・短、方・円に加え高・低についての説明もあり[10]、KSP では、AKBh.IV の長・短、方・円に加え、高・低、正・不正の知覚についても語られ、AKBh.I で説かれる全 8 種類の形色が顕色によって仮設することを示している[11]。

---

[9] AKBh.IV [Pr: 194.14-18, D: 167b1-7, P: 192a5-8]
nāsti saṃsthānaṃ dravyata iti Sautrāntikāḥ / ekadiṅmukhe hi bhūyasi varṇa utpanne dīrghaṃ rūpam iti prajñapyate / tam evāpekṣyālpīyasi hrasvam iti / caturdiśaṃ bhūyasi caturasram iti / sarvatra same vṛttam iti / evaṃ sarvaṃ /
tadyathālātam ekasyāṃ diśi deśāntareṣv anantareṣu nirantaram āśu dṛśyamānaṃ dīrgham iti pratīyate / sarvato dṛśyamānaṃ maṇḍalam iti/ na tu khalu jātyantaram asti saṃsthānaṃ /
Cf.『倶舎論』[T: 29.68b1-7]（＝『順正理論』[T: 29.535c23-29]）
然經部 a)説。形非實有。謂顯色聚一面 b)多生、即於其中、假立長色。待此長色、於餘色聚一面少中、假立短色。於四方面並多生中、假立方色。於一切處遍滿生中、假立圓色。所餘形色隨應當知。
如見火燈於一方面無間速運便謂爲長、見彼周旋謂爲圓色。故形無實別類色體。
a) 經部；『順正理論』經主　b) 一面；『順正理論』一方

[10] AKVy.IV [W: 348.21-22, D: 166b1, P: 190b4-5]
evaṃ sarvam iti / ūrdhva ikadiṅmukhe bhūyasi utpanna unnatam iti prajñapyate / adho bhūyasyāvanatam iti / eṣā dik /
このように全てが同様であるとは、上の一方の面を有するものにおいてより多く生じた時、「高である」と仮に表示される。下〔の一方の面を有するもの〕においてより多く〔生じた時〕、「低である」と〔仮に表示される〕。これは一例である。

[11] KSP [M: 4.11-17, D: 135a7-135b2, P: 157a4-7]
phyogs gcig gi sgor 'dus pa mang por snang pa ra ni ring bo'i blo 'byung / thung ngu la ni a) thung ngu'i blo 'byung / thams cad nas mnyam par snang ba la ni lham pa'i blo 'byung / khor yug nas mnyam pa la ni zlum po'i blo 'byung / dbus na mang po la ni mthon po'i blo 'byung / nyung ba la ni dma' ba'i blo 'byung / phyogs gcig gi sgor snang ba la ni phya le ba'i blo 'byung /

TA 及び LA の記述は不明なところが多いものの、冒頭の「形色は実有ではない」の根拠として AKBh.VI「賢聖品」の 4 偈に基づいて[12]、形色は瓶等と同じく、破壊されたら、その認識が生じないため、(「それ (形色) が破壊されるならば、その認識はないので、瓶等のようにである」)、実有ではなく、仮有であると解釈している。また、TA・LA には顕色は実有ではない形色の「仮設の因」として定義される。顕色が生起した差異によって仮設された形色の差異が生じることを示している[13]。

この形色仮有説に対して衆賢は『順正理論』で次のように反論している。

> 此の理は然らず。了相別なるが故に。若し一方面に唯だ顯〔色〕多く生せば、了相は中に於いて差別無かるべし。既に長と白と二の了相の異有り。故に顯の外に別に形色有り。現見するに觸有りて同根の所取なるも、了相異なるが故に體に差別有り。堅と冷、或は煖と堅との如し。是くの如く白と長とは同根の取なりと雖も、而も了相異なるが故に、體は別なるべし。故に聚色は分析して漸やくに微にして、乃至中に於いて形覺を生ずべきに至るまで、必

---

phyogs sna tshogs kyi sgo la ni phya le ma yin pa'i blo 'byung ngo //
a) omit *ni* D
一方向の面において集められるものが多く見られるならば、長いという認識が生起し、少なく〔見られる〕ならば、短いという認識が生起する。あらゆる〔方向（四方）〕より平等に見られるならば、方（正方形）という認識が生起し、周囲より平等に〔見られる〕ならば、円という認識が生起する。中心に多く〔見られる〕ならば、高という認識が生起し、〔中心に〕少なく〔見られる〕ならば、低という認識が生起する。一方向の面に見られるならば、正という認識が生起し、様々な方向の面に〔見られる〕ならば、不正という認識が生起するのである。

[12]AKBh.VI [Pr: 333.1-2, D: 7a7-8, P: 8b6-7,]
yatra bhinne na[a] tadbuddhir anyāpohe dhiyā ca tat /
ghaṭāmbuvat[b] saṃvṛtisat paramārthasad anyathā //VI. 4
あるものが破壊された場合にそれの認識は生じない、また、知（dhī）によって〔あるもの〕以外の〔諸属性を〕排除する場合に〔それの認識がないもの〕、それらは世俗有である。瓶や水の如く。〔以上と〕異なっていれば、勝義有である。（VI. 4）
a) bhinne na] S H K(Kimura) : bhinnena Pr.　b) ghaṭāmbuvat] H K : ghaṭārthavat Ms.

[13] TA [D: 7a5-7, P: 125b6-a2]　(=LA [D: 6a6-7a2, P: 8a1-4])
mdo sde pa rnams na re dbyibs ni rdzas su med de / de bcom na de'i blo med pa'i phyir bum pa la sogs pa bzhin no zhe'o //
gal te rdzas su med na der gdags pa'i rgyu ni gang zhig yin la / der btags pa'i bye brag kyang gang zhig yin zhe na / de'i phyir
phyogs gcig gi sgor zhes bya ba rgyas par smos so //
'di skad bstan par 'gyur te / gdags pa'i rgyu ni kha dog yin la / der btags[a] pa'i bye brag ni kha dog 'byung ba'i bye brag las so //
'di nyid la dpe ni / **dper na mgal me** zhes bya ba ste / ji ltar mgal me'i gzugs ni ring po dang zlum po zhes bya ba'i dngos po gzhan med kyang skye ba'i bye brag [b]las ring po dang zlum por btags pa'i bye brag[b] gi rgyu yin pa de bzhin du gzhan du yang yin no //
a) P, N: *brtags*　b) omit *las ring po dang zlum por btags pa'i bye brag* LA
経部の者たちは「形色は実有ではなく、それが壊れるならば、その認識はないので、瓶などのようにである」と言う。
もし、実有でないならば、そこに仮設の因は何であり、そこに仮設された差異も何であるのかという場合、そのため、**一方に面して**云々と言うのである。
このように説かれる、仮設の因は顕色であり、そこに仮設された差異は顕色が生起した差異によるものである。まさにこのことについて譬えは、**例えば松明**というのであり、松明の色は長いや円いという別の実体がないけれども、生じる差異により長いや円いを仮設された差異の因であり、他についても同様である。

ず少分の形覺の生因たる形色の極微有れば、中に於いて猶起こる。理必ず爾るべし。色聚の中に於いて、唯だ顯〔色〕有りて生じ、形色起こらざれば、中に於いて唯だ顯覺有りて形〔覺〕は有らず。空中の光明等の色を見るが如し。若し即ち顯色を説いて名けて形〔色〕と為せば、無分量の顯の中、亦た形覺を起こすべし。相離れざるが故に。火界の煖の如し。彼の火燈の喩は證に於いて能無し。餘處の極成に假説すべきが故に。謂はく餘處に於いて長圓等の所依の實因有り、同時に無間に、多方に安布する所の差別の所成の色聚に於いて長等極成す。是れに由るが故に火燈等の色に於いて、異時に別處に無間に轉ずる中、計度して立て假の長圓等と為す。未だ曾て世俗と勝義と俱に極成せざるもの有りて而も假立すべきを見ず[14]。

ここでの漢訳の「了相別故」は、TA での衆賢説によれば zhen pa'i khyad par las と対応し、adhyavasāyabhedāt と還梵できる。そのため、「知覚判断（zhen pa *adhyavasāya）が異なるので」と訳せる。そして、ここで衆賢は認識主体が形色である長と顕色である白と二つ異なる知覚判断を生じるため、形色と顕色とは異なる存在であると主張する[15]。衆賢のこの形色の存在を論証する

---

[14]『順正理論』[T: 29.536a4-a20]（太字部分＝『顯宗論』[T: 29.860c23-27]）
此理不然。了相別故。若一方面唯顯多生、**了相於中應無差別。既有長白二了相異。故於顯外別有形色。現見有觸同根所取、了相異故體有差別。如堅與冷、或煖與堅。如是白長雖同根取、而了相異故、體應別。**故知聚色分析漸微、乃至於中可生形覺、必有少分形覺生因形色極微、於中猶起。理必應爾。以色聚中、有唯顯生、形色不起、於中唯有顯覺非形。如見空中光明等色。若即顯色説名爲形、無分量顯中、亦應起形覺。不相離故。如火界煖。彼火燈喩於證無能。餘處極成可假説故。謂於餘處有長圓等所依實因、同時無間、於多方所安布差別所成色聚長等極成。由是故於火燈等色、異時別處無間轉中、計度立爲假長圓等。未曾見有世俗勝義俱不極成、而可假立。

[15] TA [D: 7b2-7b5, P: 126a5-8]（LA missing）
zhen pa'i khyad par las kha dog nyid la dbyibs su btags pa ni ma yin zhes 'dus bzang zer ro //
dbang po'i gzung bya mtshungs pa mams la yang zhen pa'i khyad par las don gyi khyad par mthong ste / grang ba dang sra ba bzhin no // der zhen pa'i khyad par yod pas kyang ring po'o dkar po'i snyam pa des kyang don gzhan du mi 'gyur ro //
de'i phyir 'dus pa'i mthar thug pa'i mams la yongs su gcod pa'i bye brag gi rgyur gyur pa dbyibs kyi rdul phra rab mams kyang der skyes so zhes a ba s'i ya tam / gal te gang du 'dus pa de dag mi 'thad na / der kha dog skye ba la yang dbyibs med do //
dper na mar me la sogs pa skye ba la yongs su ma bcad par kha dog dang dbyibs su mi 'gyur te tha mi dad pa'i phyir ro //
me'i khams dang dro ba bzhin no //
知覚判断（zhen pa *adhyavasāya）が異なるので顕色のみに形色を仮設することはないと衆賢は言う。
同一の根の所取についても知覚判断が異なるので対象の相異を見るのであり、冷〔と堅〕・暖〔と堅〕のようにである。それに対する、「長い」、「白い」というこの知覚判断の相異があるのに、〔顕色のみに形色を仮設するなら〕対象が異ならないことになってしまう。
そのため、諸々の完生した有為※（'dus pa'i mthar thug pa）を区別する差異の因になった形色の諸々の極微もそこに生じるという決定される（*avasīyatām）
もし、それら有為が不合理ならば、そこに顕色が生じでも形色は〔生じ〕ないのである。例えば、光明等が生じる場合に区別なく顕色と形色とにならないのであり、異ならないためである。火界と熱とのようである。
※完生した有為（'dus pa'i mthar thug pa）は漢訳の「聚色」「色聚」に対応するようであり、「聚色」や「色聚」は saṃghāta（rūpa）に還梵できる。そのため、チベット訳 'dus pa'i mthar thug pa は誤訳の可能性もある。Cf. 注 15 下線部。
尚、那須円照［2009］p.110 では、漢訳の「了相別故」を「相状の認識に異なりがあることから」と訳されて

背景には認識されているから存在するという「羯磨品」の三世実有説中で示される考えに基づいている[16]。世親の主張によると、白い顕色が一つ方向に多くあれば、白いという性質だけが認識されるはずなのに、実際には白いと異なる性質の長いも認識される。すなわち、眼で認識される形色と顕色はそれぞれ性質が異なるために、形色と顕色はそれぞれ異なる存在である。そのため、形色はただ顕色の配列によって仮設されたものではなく、顕色と異なる存在であると衆賢は主張する。その実例として身根が触として堅さと冷たさ・堅さと煖かさという異なる性質の感覚を認識することを挙げて、眼根が白いという顕色と長いという形色の異なる性質を認識しても問題はないため、顕色と形色は本質が異なって存在すると主張する。

そして、世親の松明の例に対して、衆賢は長・円等は同時に別処に物質が連続して広がっているものであるが、松明の移動で成り立った長・円等は異時に別処に炎が連続して広がっているものを誤って認識した仮の長・円に過ぎないとする。そのため、松明の例は世俗的にも勝義的にも成立しないので、形色仮有説の根拠として役に立たないと批判している[17]。

世親への反駁は種々あるが、衆賢の重要な主張としては、顕色とは別に形色が眼で認識されるので、形色は存在するということである。

いるが、この語は『倶舎論安慧釈』(**Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthanāma* (TA)) によれば、zhen pa'i khyad par las となっており、adhyavasāyabhedāt と還元しうると、「判断が異なることに基づいて（＝判断に異なりがあることから）」とも訳せることが指摘されている。

[16]『順正理論』[T: 29.621c21]: 爲境生覚、是真有相。(境と爲り覺を生ずる、是れ真の有相なり。) Cf. 浪花 [1990] pp.144-145。

[17] この松明の例に対して、TA にも衆賢の説が見られる、直訳すると以下のようになるが、意味は難解である。

TA [D: 7a7-7b2, P: 126a2-4] (LA missing)

mgal me'i dpe yang mi nus so zhes slob dpon 'dus bzang zer ro / /

gtso bo ni btags par yod pa yin la / mgal me'i ring po la sogs pa yod pa ma yin pa bzhin gtso bo'i dbyibs so / /de'i phyir mgal me bzhin kha dog dang dbyibs dag btags pa dag tu rigs pa ma yin no / /

de lta na 'o na ji ltar gnas pa'i gzugs la sogs pa la bum pa dang snam bu la sogs par btags par rigs she[a)] na / bum pa dang snam bu la sogs pa mams la gtso bo'i bdag[b)] tu btags pa med pa'i phyir dang / phung po bzhi mams la gtso bo'i bdag med pa'i phyir ro / /

a) P, N: *parigs she* b) P: *btag*

松明の例も無効であると軌範師衆賢は言う。

主因（仮設の因）は仮設有であって、松明の長い等が存在するではないように、主因（仮設の因）の形色である。したがって、松明のように顕色と形色が両方とも仮設のものとは不合理である。

そうであるなら、どうして配列された色などを瓶と布などとして仮設されるのは正しいのか。諸々の瓶と布などを主因（仮設の因）の本体として仮設することはないから、そして四蘊について主因（仮設の因）の本体はないからである。

2. 形色と長・短等とを区別する

2.1 二根取批判を反駁する

AKBh.IV で世親は形色非実有の根拠として、二根取の問題を以下のように指摘する。

なぜなら、もし〔形色が実有〕ならば、

二〔根〕によって把握されるべきものであろう。(IV.3c)

なぜなら、眼によって見て「長い」と判断され、身根によって触れられても〔「長い」と判断される。〕二〔根〕によってこれ〔長いという形色〕が把握されることになるであろう。しかし、〔「長い」という〕色処のものが二〔根〕によって把握されることはない。さもなければ、所触において「長い」等が把握されることがあるのと同様に顕色においても〔「長い」という把握が〕想定されるべきである[18]。

ここで世親は一つの境は必ず一つの根によって認識されるという一根一境の考えに基づいて、一つの境が二つの根によって認識されるという二根取の過を指摘している[19]。具体的には、「長い」

---

[18] AKBh.IV [Pr: 194.18-21, D: 167b7-168a1, P: 192a8-192b2]
yadi hi syāt /
dvigrāhyaṃ syāt //IV.3c//
cakṣuṣāpi hi dṛṣṭvā dīrgham ity avasīyate kāyendriyeṇāpispṛṣṭveti dvābhyām asya grahaṇaṃ prāpnuyāt / na ca rūpāyatanasya dvābhyāṃ grahaṇam asti / yathā vā spraṣṭavye dīrghādigrahaṇaṃ tathā varṇe'pi saṃbhāvyatāṃ /
Cf.『倶舎論』[T: 29.68b7-11]（＝『順正理論』[T: 29.535c29-536a4]）
若謂實有別類形色、則應一色二根所取。謂於色聚長等差別、眼見身觸俱能了知。由此應成二根取過。理無色處二根所取。然如依觸取長等相、如是依顯能取於形。

[19] この問題の思想的な背景は「一根一境」説である。AKBh.I には、それぞれの根はそれぞれに対応する境のみが認識できるとある。
AKBh.I [Pr: 6.7-7.10, D: 30a3-31a1, P: 31b5-32b4]
arthāḥ pañcā nirdeśyāḥ / tatra tāvat
rūpaṃ dvidhā // I.10a //
varṇaḥ saṃsthānaṃ ca / tatra varṇaś caturvidho nīlādiḥ / tadbhedā anye / saṃsthānam aṣṭavidhaṃ dīrghādi visātāntam / tad eva rūpāyatanaṃ punar ucyate/
vimśatidhā // I.10a' //
tadyathā nīlaṃ pītaṃ lohitam avadātaṃ dīrghaṃ hrasvaṃ vṛttaṃ parimaṇḍalam unnatam avanataṃ sātaṃ visātaṃ abhraṃ dhūmo rajo mahikā chāyā ātapaḥ ālokaḥ andhakāram iti /
・・・・・・
spraṣṭavyamekādaśadravyasvabhāvam catvāri mahābhūtāni / ślakṣṇatvam karkaśatvam gurutvam laghutvam śītam jighatsā pipāsā ceti /
五境を解説しなければならない。その中で、まず、
色は二種である。(I.10a)
顕色と形色とである。その中で、顕色は青などの4種であり、その他〔の顕色〕はそれら〔青など〕の区別である。形色は長に始まって不正に終わる8種である。また、その色処は、
二十種である。(I.10a')
と説かれる。すなわち、青・黄・赤・白、長・短・方・円・高・下・正・不正、雲・煙・塵・霧・影・光・明・闇である。
（中略）

という形色は眼で見て認識されることに加えて、身体で触れることによっても「長い」と認識されることを示し、色処の 1 種である形色は眼根と身根の二根で認識されてしまうので、形色は実有ではないと批判する。ここでの経部による有部への二根取の過の指摘は TA、LA にも見られる、主旨は AKBh で述べられたことと同様である[20]。TA では続けて有部と経部の問答が挙げられる。そこで、形色の実有を認めない経部にとっては二根取の過にならないのかと問われるが、経部の回答の記述は難解なため、現時点では正確に理解できない[21]。しかし、経部にとってはそもそも形色の実有が認められないので、当然二根取の過にならないという意図は考えられる。

世親の二根取批判に対して、衆賢は『順正理論』で以下のように反駁する。

> 應に二根取なるべしとの難も亦た成せず。長等は但意識の境と為すが故に。諸の假有は唯是れ意識の所縁の境界なるを以てなり。前に既に辨ぜしが如し。能く長等を成ずる種の極微の是くの如く安布するが如きを説いて形色と為す。是れ無分別の眼識の所取にして、身

所触は十一種類がある。四大・滑らか・粗い・重い・軽い・冷たい・飢・渇である。
Cf.『倶舎論』(玄奘) [T: 29.2b21-2c24]
次説五境。頌曰。

色二、或二十、聲唯有二種。
味六。香四種。觸十一爲性。

論曰、色二者、一顯二形。顯色有四、青・黄・赤・白。餘顯是此四色差別。形色有八、謂長爲初不正爲後。或二十者、即此色処復説二十、謂青・黄・赤・白、長・短・方・圓・高・下・正・不正、雲・煙・塵・霧・影・光・明・闇。
(中略)
觸有十一。謂四大種・滑性・澁性・重性・輕性及冷・飢・渇。

[20] TA [D: 7b5-8, P: 126a8-b2] (=LA [D: 7a2-3, P: 8a4-6])
gal te yod na ni gnyis gzung 'gyur zhes bya ba[a] ni dbang po gzugs can gnyis te / mig dang[b] reg pas kyang ring po la sogs par shes pa'i phyir ro / /
gzugs kyi skye mched la ni zhes bya ba rgyas par 'byung ste / mig la sogs pa'i dbang po'i dbang gis[c]ugs la sogs pa'i skye mched tha dad pa yin la / dbyibs kyang gzugs kyi skye mched kyi khongs su gtogs pa yin te / de'i phyir de ni re zhig[d] reg pas 'dzin par mi 'thad do / /
a) LA: D, C: ba'i b) LA: D, C: gi c) P, N: gi d) omit *re zhig* LA
もし〔形色が実在する〕**ならば、二**〔根〕**によって把握されるべきものであろう**というのは、色を有する二根によってであり、眼〔根によって見て「長い」などと判断され〕、〔身根によって〕触として「長い」などと判断されることになってしまう。
色処のものが云々とは、眼などの根〔はそれぞれが異なるので〕、色などの処も異なるのであり、形色も色処に含まれるのである。そもそも、その〔眼根の処である形色〕は〔身根によって〕触として把握されるのは不合理である。

[21] TA [D: 7b8-8a1, P: 126b2-4] (LA missing)
gal te kha dog kho na skye ba'i khyad par la ring po la sogs pa'i blo yin na / mdo sde pa'i 'di skyon du ci ltar mi 'gyur zhe na / gang gi tshe lus kyi dbang pos mun pa la ring po'o snyam du 'dzin par mi 'gyur ba de'i tshe ring po la sogs pa'i shes pa ni de las de nyid kyi phyir zhes bya ste / dbang po mams dang skye mched rang gi mtshan nyid kyi yul yin pa'i phyir ro / /
【有部問】顕色のみの特殊な生起に対して長い等の認識があるならば、経部にとってこれ(「形色は顕色とは別の種類ではない」という説)はどうして〔二根取の〕過失にならないのか。
【経部答】身根が暗闇において長いと理解することがないとき〔も生じ得る〕長い等の認識は〔身根の対象と〕は別異であるから、と言われる。また、諸根は処の自相を対象とするからである。

の能取に非ず。是くの如きが形色なり。身根に依って堅・濕等を了するが如く、長短等を了するは是くの如くならざるが故なり。闇中に堅・濕等を了し、即ち彼の位に於いて或いは次後の時、即ち能く長短等の相を了知するに非ざるを以てなり。要ず一面の多くの觸の生せし中に於いて、身根門に依って觸を分別し已って、方に能く比度して、觸と俱行する眼識所牽の意識の受くる所の、是くの如き相状差別の形色を知る。火の色を見、及び花の香を嗅ぎ、能く俱行の火の觸と花の色を憶うが如し。現見するに眼識は其の所應に随って、一時に形〔色〕と顯〔色〕との俱了有り。意識の分別は前後定まることなし。顯〔色〕と形〔色〕とは是れ一眼識の所縁の境なるを以ての故に。意識の分別は時の差別なるが故に。了相異なるが故に、其の體同じからず。形〔色〕は亦た觸に非ず。寧んぞ身根は能く形〔色〕を取るの義有らんや。故に二根取なるべしと難ずべからず[22]。

二根取批判に対して、衆賢はここで形色と長等8種を区別することによって反駁する点に注目すべきである。重要であるのは衆賢は長等8種を即形色であるとは認めてない。衆賢は身根が堅さや湿り気等を認識できるようには長等8種を認識できないとする。堅さや湿り気等は暗闇でも身根によって直接に認識できるが、長等8種を認識する際、必ず身根で対象に多く触れることを通して推測して、眼で見た経験を思い起こして意識の判断によって認識されるものである。その具体例として、火の色を見て火の煖かさを、花の香りを嗅いで花の色を思い起こすことが示される。そのため、長等8種はただ比較によって生じる相対的なものであり、仮有であるとする[23]。

しかし、長等8種を成立させる根源的な物質を形色であるとしている。その根源である形色は

---

[22] 『順正理論』[T: 29.536a20-b5]
應二根取難亦不成。**長等但爲意識境故。以諸假有唯是意識所縁境界。如前已辨。能成長等如種極微如是安布説爲形色。是無分別眼識所取、非身能取。如是形色。如依身根了堅濕等、了長短等不如是故。以非闇中了堅濕等、即於彼或次後時、即能了知長短等相。要於一面多觸生中、依身根門分別觸已、方能比度、知觸俱行眼識所牽意識所受、如是相状差別形色。如見火色及臭花香、能憶俱行火觸花色。**現見眼識隨其所應、有於一時形顯俱了。意識分別前後無定。以顯與形是一眼識所縁境故。意識分別時差別故。了相異故、其體不同。形亦非觸。寧有身根能取形義。故不應難應二根取。
『顯宗論』[T: 29.861a26-b13]
經主此中作如是難。若謂實有別類形色。則應一色二根所取。謂於色聚長等差別眼見身觸俱能了知由此應成二根取過。理無色處二根所取。然如依觸取長等相。如是依顯能取於形。此難不然。非許長等諸假形色二根取故。以彼長等諸假有法。**定是意識所縁境故。一切假有唯是意識所縁境界。如前已辨。能成長等如種極微如是安布説爲長等**[a]**。是無分別眼識所取、非身能取。如是形色。如依身根了堅濕等、了長短等不如是故。以非闇中了堅濕等、即於彼位或次後時、即能了知長短等相。要先分別堅等相已。然後長等比智方生。故長等形非身根境。謂於一面觸多生中、依身根門分別觸已、方能比度、知觸俱行眼識所牽意識所受、如是相状差別形色。如見火色及嗅花香。能憶俱行火觸花色。**
a) 『順正理論』での「形色」は『顯宗論』において「長等」になっており、文脈によると、「形色」が正しいと考える。
[23] なお、パーリアビダンマ七論の第一であるDhsの註釈書であるAsl.635 [PTS: 12.317.15-24]でも、世間通用の名称として長など12の色処は、比較（upanidhāya）と配列（saṁnivesa）の2つの条件によって仮に存在するものとして他の色処とは区別されている。Cf. 拙論［2019］pp.85-90.（77-82）。

意識を伴わない無分別の眼識によって認識されるとし、身根によっては認識されないため、仮有ではないと主張する[24]。そして、形色は身根の対象ではないため、世親の二根取批判は成立しないとする。

ここでの衆賢の主張はTA、LA にも毘婆沙師の説として見られる。形色は身根によって直接に認識されるのではなく、後で意識の判断によって認識されるという点は『順正理論』の記述と一致するが、『順正理論』で記述された衆賢の重要な主張である形色と長等を区別することについての記述は見られない[25]。また、TA では続けて衆賢の説に対して、経部の反論が挙げられる。反論の主旨は、身体で触って後に意識の働きによって長いなどを認識するが、その長いなどは所触と別の実体として立てられないと有部が主張するのと同じ理由で、形色も顕色と別の実体として立てられないとするものである[26]。

2.2 不離関係批判を反駁する

前述した世親の二根取の批判に対して、AKBh.IV では先ほどの衆賢の主張でも見られたように有部は想起（smṛti）という概念を挙げて反論する。

> その場合は、想起のみが所触と共に起こっているのである。しかし、直接に〔形色を〕把握しない。例えば、火の色を見て、それ（火）の煖かさを想起するようにである。さらに、花の香を嗅いで、その〔花の〕色〔を想起するようにである〕[27]。

---

[24] 以上の点から、ここでの引用部分の下線部を浪花［1990］p.146 では「長短などは意識の所産であり、それは仮有であるが、その長短などを生み出す絶対量は実在する。その実在が形色である。（中略）形色そのものは眼識の所取であり実有であるが、長短などは意識の所縁であり仮有である。形色は眼識の所取であっても、眼識によっては未だ長短などの覚は生じない。」と釈されている。

[25] TA [D: 8a1-2, P: 126b4-6] （=LA [D: 7a3-4, P:8a6-8] ）
res 'ga' bye brag tu smra ba ring po la sogs pa'i dbyibs lus kyi[a] dbang pos 'dzin pa ni ma yin te / 'o na ci zhe na / reg bya'i yan lag de ltar gnas pa lus kyi dbang pos[b] dmigs pa dag la phyis ring po la sogs par shes[c] pas mig dang reg pa nyid[d] kyis[e] ring po la sogs par 'dzin par thal bar mi 'gyur ro zhes smra bas / de'i phyir **yang ji ltar reg bya la** zhes bya ba rgyas par smos[f] so //
a) P, N: kyis b) LA より po's に訂正 c) LA: zhen d) LA より gnyid に訂正 e) P, N: kyi f) N: smros
ある時、毘婆沙師は長いなどの形色は身根によって把握されるのではなくて、触の一部はそのように配列し、身根の所縁対して、後で長いなどを認識するから、眼と触の二つによって長いなどを把握される過失にならないと言うので、そのため**さもなければ、所触において**云々と言うのである。

[26] TA [D: 8a2-4, P: 126b6-8] （=LA [D: 7a4-6, P: 8a8-b2] ）
ji ltar reg bya de nyid da ltar gnas pa yan lag re re nas gzung ba na phyis nas ring po la sogs par shes par 'gyur gyi / reg bya las don gzhan du gyur pa ring po la sogs par gzung ba ni ma yin pa de bzhin du / kha dog dag kho na mam pa der gnas pa yan lag re re nas gzung ba na phyir[a] ring po la sogs par shes kyi / kha dog las don gzhan du gyur pa ring po la sogs pa gzung ba ni ma yin no zhes yid ches par bya'o / /
a) LA より phyis に訂正
長いなどは所触そのものがそのように配列されたそれぞれの部分によって〔触られて〕把握されて、後で〔意識の働きによってこれは長いなどを〕認識されるが、長いなどは所触と別の対象として〔身体で触られて〕把握されることはない。同様に、長いなどは顕色のみがそのような形で配列されたそれぞれの部分によって〔眼で見て〕把握されて、後で〔意識の働きによってこれは長いなどを〕認識されるが、長いなどは顕色と別の対象として〔眼で見て〕把握されるのではないと考えるべきである。

[27] AKBh.IV [Pr: 194.22-23, D: 168a1-2, P: 192b2-3]

有部は身根が対象を認識する時、認識主体は対象に触れて、その対象の形に関する想起が起こるだけで、別にその対象への直接の認識が起こることではないと考える。そして、先ほどの衆賢の例と同じく火の色を見て火の煖かさを、花の香りを嗅いで花の色を思い起こすことが示される。ここでの想起という概念について TA、LA の中では、「比量」に解釈される。つまり、身根によって長いなどの形色を直接認識するのではなく、推理によって認識するのである。そしてその例として、火の色を見て火の煖かさが推理されることが挙げられる[28]。

以上のように、有部は想起という概念を挙げて、世親の二根取批判を反駁する。それに対して、AKBh.IV で世親は経部の立場から以下のように再反論する。

> これ（火・花）に関しては、〔共に〕不離関係があるので、相互に想起することは合理的である。しかし、いかなる所触も、いかなる形色においても確定的〔な関係〕はない。もしそうであれば、その〔形色〕に関して、確定的に想起することがあるだろうが[29]。

世親は、有部が述べた火の色を見て火の煖かさを、花の香りを嗅いで花の色を思い起こす場合には、火の色と火の煖かさ、花の香りと花の色との間には不離関係があるからお互いに想起することができると考える。しかし、全ての場合に、所触と形色は不離関係があることはないとする。

---

smṛtimātraṃ tatra spraṣṭavyasāhacaryād bhavati / na tu sākṣād grahaṇaṃ / yathāgnirūpaṃ dṛṣṭvā tasyoṣṇatāyāṃ smṛtir bhavati / puṣpagandhaṃ ca ghrātvā tadvarṇa iti /
Cf.『倶舎論』[T: 29.68b11-14]
豈不觸形俱行一聚故、因取觸能憶念形。非於觸中親取形色。如見火色便憶火煖、及嗅花香能念花色。

[28] TA [D: 8a4-6, P: 126b8-127a2] （=LA [D: 7a6-7b1, P: 8b2-5] ）
chos mngon pa bas kha dog dang reg bya las tha dad pa'i dbyibs brjod par 'dod pas slar smras pa ni **de la ni**[a] **reg bya dang lhan cig spyod pa** zhes bya ba rgyas par 'byung ba'o / /
'di dran pa'i sgra ni rjes su dpag pa la brjod kyi / ji ltar mig gi kha dog bzhin reg pas dngos su 'dzin pa ni ma yin te skye mched mtshungs pa ma[b] yin pa'i phyir ro snyam du bsams[c] pa'o / /
dper na me'i gzugs zhes bya ba rgyas par 'byung ste / ji ltar dbang po gzhan gyis[d] gzung bar bya ba mi 'khrul pa las dbang po gzhan gyis gzung bar[e] bya ba rjes su dpag pa yin pa de bzhin du 'dir yang ston to / /
a) omit *ni* LA b) LA: P, N: omit *ma* c) P, N: bsam d) P, N: gyi e) P, N: pa
アビダルマ師は顕色と所触とは異なる形色を主張しようとして、さらに、**その場合は、〔想起のみが〕所触と共に起こっている**云々と言う。
この想起という語は比量の意味であって、眼〔が直接〕顕色〔を把握する〕ように、触が〔直接形色を把握するのではない〕。処が異なるのであると考えるのである。
例えば、火という色云々と言う。ある根（眼根）の所取（赤い火の色）という不離関係にあるものに基づいて、別の根（身根）の所取（火の煖かさ）を推理する。この場合も同様であると示したのである。

[29] AKBh.IV [Pr: 194.26-195.1, D: 168a2-3, P: 192b3-4]
yuktam atrāvyabhicāratvād anyenānyasya smaraṇaṃ / na tu kiṃcit spraṣṭavyaṃ kvacit saṃsthāne niyataṃ yatas tatra smaraṇaṃ niyamena syāt /
Cf.『倶舎論』[T: 29.68b14-16] （=『順正理論』[T: 29.536b5-7] ）
此中[a]二法定不相離故、因取一可得念餘、無觸與形定不相離。如何取觸能定憶形。
a) 此中；『順正理論』經主於此復作是言。諸有

また、当該の AKVy の記述[30]によれば、滑らかさ・粗さと長・短との間には不離関係はないことが例として示されている。そのため、所触によって形色を想起することは成立しないとする。

世親のこの反論に対して、衆賢は『順正理論』で以下のように反駁する。

> 經主は此に於て復是の言を作さく。「諸有の二法は、定んで相離れざるが故に。一つを取るに由りて餘を念ふを得べきも、觸と形とは定んで相離れざること無し。如何にして觸を取りて能く定んで形を憶せん」と。
>
> 此れは亦た理に非ず。現見するに世間の諸の觸聚の中、形〔色〕有りて定まるが故に。謂はく形〔色〕は觸に於いて、定める者無しと雖も、而も一面の多触の生ずる中に於いて、定んで長色有り。一切處に觸遍ねく生ずる中に於いて、定んで圓色有り。是くの如き等の類は、應に随って當に知るべし。故に觸は形〔色〕に於いて決定する者有り。觸は顯〔色〕に於いて形〔色〕の如く定まること有るに非ず。觸を了する時、能く形色を憶ふべし。觸の是の如く安布して、是くの如きに於いて顯〔色〕の決定すること形〔色〕の如きもの有ること無きを以てなり[31]。

世親は所触と形色には必ずしも不離関係がないため、有部の所触によって形色を想起するという考え方を批判するが、衆賢は諸々の所触の集合には、必ず形色（長・短等）[32]の認識が起こる

---

[30] AKVy.IV [W: 349.8-16, D: 166b1, P: 190b4-5]
āha / **yuktam atra** iti vistaraḥ / **yuktam atra** agnāv **avyabhicārāt** uṣṇatāyāś ca varṇasya ca / **anyenānyasmaraṇam** agnirūpeṇoṣṇatāyāḥ / puṣpagandhena ca tadvaṇasya / **na tu kiṃcid** iti vistaraḥ / **na tu kiṃcit spraṣṭavyaṃ** ślakṣṇatvādi **kvacid** iti **samsthāne** dīrghādau **niyataṃ** / **yato 'tra** saṃsthāne spraṣṭavyaṃ spṛṣṭvā **samaraṇaṃ niyamena syāt** / yatra hy agnirūpaṃ / tatra taduṣṇatayā bhavitavyaṃ / yatra ca campakagandhaḥ / tatra tadrūpeṇa bhavitavyaṃ / na tu yatra ślakṣṇatvaṃ karkaśatvaṃ vā tatra dīrghatvena hrasvatvena vā bhavitavyaṃ / tasmād taduṣṇatārūpayor niyamena yujyate saṃsthāne tu niyamena smaraṇaṃ na prāpnoti /
これ（火・花）に関しては合理的である云々と言う。**この**火については、煖かさと色とは**不離関係があるので、相互に想起することは合理的である。**〔例えば〕火という色によって〔その〕煖かさ〔が想起する〕、また花の香によってその〔花の〕色〔が想起する〕。**しかし、いかなる**云々とは、**しかし**、〔例えば〕滑らかさ等の**いかなる所触**と〔及び〕長等の**いかなる形色**〔との間〕**には必然的〔な関係〕はないであろう。そのため、その**形色の所触に触れることによって、**その**形色の想起が必然的に起こることはない。なぜなら、火という色には、その〔火の〕煖かさがあるはずであり、また玉欄の香りには、その〔花〕の色があるはずである。けれども、滑らい或いは粗い〔という所触〕には、長い或は短い〔という形色〕があるはずであることはないのである。そのために、その〔火の〕煖かさと〔火という〕対象〔との間〕には必然的〔な関係があることは〕合理的であるけれども、形色については〔そのような〕必然的〔な関係がないため〕に、想起しない。

[31] 『順正理論』[T: 29.536b5-18]（太字部分＝『顯宗論』[T: 29.861b14-19]）
經主於此。復作是言。諸有二法、定不相離故。因取一可得念餘、無觸與形定不相離。如何取觸能定憶形。此亦非理。現見世間諸觸聚中、有形定故。謂形於觸雖無定者、而於一面多觸生中、定有長色。於一切處觸遍生中、定有圓色。如是等類、隨應當知。故觸於形有決定者。非觸於顯有定如形。可了觸時、能憶形色。以無有觸如是安布、於如是顯決定如形。

[32] また、ここで注意すべきは、前述した通り衆賢はあくまでも形色と長等を区別している点である。長等は意識を伴って身根で認識される仮有なものであるとするが、形色は意識を伴わない無分別の眼識によって認識されるのである。ここで世親の想起への批判に反論するために、所触と形色には、想起によって身根で認

と考える。直前の段落では、形色（長・短等）は身根の対象ではないと主張していたが、一方で対象に多く触れることを通して推測して、眼で見た経験を思い起こして意識の判断を伴うことで形色（長・短等）が身根によって認識されることも示されていた。そこで、TA の中でも同じ記述が見られるように、衆賢は意識が働くまでは触れることで長等を認識することはできないが、多く所触があり配列されていれば、触れているうちに意識が働き、必ず長或いは円等に対する認識が生じるとする[33]。また、身根で所触を認識する際、形色（長・短等）を想起することはできても顕色を想起することはできなく、所触と形色（長・短等）には、想起によって身根で認識されるという不離関係があるとしている。また、所触の配列によって顕色は起こらないことも指摘されている。つまり、ここでも形色と顕色の性質の違いが述べられている。

終わりに

以上の検証によって、衆賢の主張する形色が如何なるものであり、それが存在する証拠は何であるという点が明らかになった。『順正理論』「辯業品」において、衆賢は AKBh で説かれたような長等 8 種の形色の一部分が身表業であるという身表形色説を言わず、形色と長等 8 種を区別することが注目すべきである。重要であるのは衆賢は長等 8 種を即形色であるとは認めてないことである。その理由は、身根は所触を認識するのと長等 8 種を認識するのとは異なり、前者は直接に認識できるが、後者を認識する際、必ず身根で対象に多く触れることを通して推測して、眼で見た経験を思い起こして意識の判断によって認識されるものである。そのため、長等 8 種はただ比較によって生じる相対的なものであり、仮有である。しかし、長等 8 種を成立させる根源的な物質を形色であるとしている。その根源である形色は意識を伴わない無分別の眼識によって認識されるとし、仮有ではないとする。ここで、衆賢が形色に与えた定義は当然経部の形色はただ顕色の様々な配列によって輪郭が現れた仮有であるという説と異なっており、AKBh で説かれた有部の従来説長等 8 種は形色であり、実有であるという説とも異なっており、衆賢独自の説であることが分かる。

また、「辯業品」において、衆賢は「了相別故」、すなわち知覚判断の相異という根拠によって

識されると説明しているが、あくまでもそれは仮有であり、本来形色は眼識によって認識されるのである。そのため、この場合、「形色」という言葉は「長・短等」を指すと考える。

33 TA [D: 8a7-8b1, P: 127a3-127a4]（LA missing）
de nyid smras pa de lta mod kyi reg[a] bya las dbyibs nges pa[b] reg bya 'dus pa la yang nges pa yod do[c] //
phyogs gcig gi sgor reg bya phal cher byung ba la ring po nyid kyi dbyibs nges pa dang / khor yug tu byung ba la zlum po zhes bya ba dang de bzhin du gzhan la yang [8b1] sbyar ro //
a) P: rig　b) D, C: par　c) P, N: de
それを言うことはそうであるが、所触によって形色が確定される。所触の集まりに〔その形色〕も確定がある。一方に面して所触が多く生起して、長いという形色が確定される。遍く生起して、円ということと同様に他の場合も同様である。

形色の存在を証明しようとする。眼で認識される形色と顕色はそれぞれ性質が異なるために、形色と顕色はそれぞれ異なる存在である。そのため、形色はただ顕色の配列によって仮設されたものではなく、顕色と異なる存在であると衆賢は主張する。

以上のように、衆賢はまず同論の「辯瀚眠品」の三世実有説中で示されるような、認識されるから存在するという考え[34]に基づいて、まず認識論的に形色の実有を証明する。続く『順正理論』「辯業品」の記述で、経部の反駁を中心に衆賢は形色の実有を存在論的に証明し、自身の身表業・形色及び極微に関する考えを詳細に論じている。衆賢の形色実有説には有部の代表思想である三世実有説との関わりがあると考えられる。また、形色の極微については空界色や隣阿伽色との関係も考えられる。今後は以上の諸問題を意識しながら、さらに衆賢の形色及び身表業論を解明する。

略号及び参考文献一覧

略号

AKBh : *Abhidharmakośabhāṣya* (Vasubandhu) Skt. : critical text based on Pr.

Pr : *Abhidharam kośa bhāṣya of Vasubandhu*, Tibetan Sanskrit Works Series vol.VIII, ed. by P.Pradhan,K.P.Jayaswal Research Institute, Patna 1967.

Tib. : *chos mngon pa'i mdzod kyi bshad pa*, tr. by Jinamitra & dPal brtsegs, D: (Tohoku No.4090) ku25b1-khu95a7 ; P: (Otani No.5591) gu27b61-ngu109a8.

AKVy : *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā* (Yaśomitra) Skt. : critical text based on W.

W : *Sphuṭârthā Abhidharmakośavyākhyā* the work of Yaśomitra part I, II ; edited by U. Wogihara. – Sankibo Buddhist Book Store, 1989.

Tib. : *chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad*, tr. by Jinamitra & dPal brtsegs, D: (Tohoku No.4092) gu1b1-ngu333a7 ; P: (Otani No.5593) cu1b1-chu383a8.

Asl : *Attasālinī* (Buddhaghosa?) PTS.12.

C. : Cone edition.

D. : Derge edition.

Dhs : *Dhammasaṅganī* PTS.31.

KSP : **Karmasiddhiprakaraṇa*, *las grub pa'i rab tu byed pa* (Vasubandhu) tr. by devendrarakṣita & viśuddhasiṃha, D:(Tohoku No.4062)shi134b2-145a6 ; P: (Otani No.5563) si156a5-168b6, critical text based on M.

[34] なお、認識されているから存在するという考えは、『識身足論』「目乾連蘊」に初めて説かれるようである。Cf.注 10, 17。

M：室寺義仁『成業論:チベット訳校訂本』（*The Tibetan Text of the Karma siddhi prakarana of Vasubandhu with Reference to the Abhidharma kośa bhāsya and the Pratītya samutpāda vyākhyā* Critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking Editions of the Tibetan Tanjur），室寺義仁（私家版）京都 1985.

LA：**Abhidharmakośaṭīkā Lakṣaṇānusarīṇī nāma, chos mngon pa'i mdzod kyi 'grel bshad mtshan nyid kyi rjes su 'brang ba zhes bya ba* (Pūrṇavardhana) tr. by kanakavarman & pa tshab nyi ma grags, D: (Tohoku No.4093) cu1b1-chu322a7 ; P: (Otani No.5594) ju1b1-nyu391a7.

N：Narthang edition.

P：Peking edition.

PTS：Pāli Text Society.

T：大正新脩大蔵経.

TA：**Abhidharmakośabhāṣyaṭīkā Tattvārthā nāma, chos mngon pa mdzod kyi bshad pa'i rgya cher 'grel pa don gyi de kho na nyid ces bya ba* (Sthiramati) tr. by dharmapālabhadra, D: (Tohoku No.4421) tho1b1-do387a7 ; P: (Otani No.5875) to1b1-tho565a8.

『倶舎論』（真諦訳）：婆藪盤豆造眞諦譯『阿毘達磨倶舎釋論』巻第十~第十三「分別業品」（T1559.vol.29:225a15- 252b22）

『倶舎論』（玄奘訳）：世親造玄奘譯『阿毘達磨倶舎論』巻第十三~第十八「分別業品」（T.1558.vol.29: 67b03-98b10）

『順正理論』：尊者衆賢造・玄奘訳『阿毘達磨順正理論』八十巻（T1562; vol.29）

『顯宗論』:尊者衆賢造・玄奘訳『阿毘達磨藏顯宗論』四十巻(T1563; vol.29)

参考文献

青原令知編

［2015］『倶舎—絶ゆることなき法の流れ—』龍谷大学仏教学叢書4、自照社出版

［2018］「入滅、分裂、結集、アビダルマ: Sangiti-sutra の成立背景」佛教學研究 74:7-35

赤沼智善

［1976］『阿毘達磨順正理論』国訳一切經・毘曇部27、改訂版、大東出版社（初版 1933）

［1985］『漢巴四部四阿含互照録』臨川書店（初版 破塵閣書房 1929）

江島恵教

［1986］「スティラマティの『倶舎論』註とその周辺」『仏教学』19: 25-32

小谷信千代ほか

［2015］「新出梵本『倶舎論安慧疏』（界品）試訳（3）」、真宗総合研究所研究紀要 33: 115-143

荻原雲來
［1933］『和譯稱友倶舍論疏』梵文倶舍論疏刊行會
川村昭光
［1978］「Sautrāntika の形色非実有論」『印度学仏教学研究』27: 168-169
木村誠司
［2012］「アビダルマの二諦説—訳注研究・インド編 I—」『駒澤大学仏教学部論集』43: 468-434
木村泰賢
［1975］『阿毘達磨大毘婆沙論』国訳一切經・毘曇部 7、改訂版、大東出版社（初版 1929）
木村泰賢・西義雄・坂本幸男
［1975］『阿毘達磨大毘婆沙論』国訳一切經・毘曇部 10、改訂版、大東出版社（初版 1930）
工藤道由
［1983］「身表形色説　—表業・無表業—」『仏教学』16: 1-21
櫻部建
［1969］『倶舍論の研究　界・根品』法藏館
「1973」「説一切有部アビダルマにいう八種の「形色」について」『仏教研究』3: 48-53
佐々木現順
［1990］『仏教心理学の研究：アッタサーリニーの研究』法藏館
浪花宣明（上杉宣明）
［1970］「説一切有部の極微論研究」『仏教学セミナー』24 号
［1990］「パーリ仏教における色法をめぐる諸議論—形色・極微—」『仏教研究』19: 139-162
［2008］『パーリ・アビダンマ思想の研究：無我論の構築』平楽寺書店
［2014］『法集論註：Dhammasaṅgaṇi-aṭṭhakathā と Dhammasaṅgaṇi-mūlaṭīkā 』平樂寺書店
那須円照
［2009］『アビダルマ仏教の研究：時間・空間・涅槃』永田文昌堂
那須良彦
［2008a］「空界と虚空無為との区別—婆沙論を中心として—」『印度学仏教学研究』56-2: 865-861
［2008b］「衆賢における空界と虚空無為」『印度学仏教学研究』57-1: 360-356
西義雄
［1976］『阿毘達磨倶舍論』国訳一切經・毘曇部 25、改訂版、大東出版社（初版 1935）
舟橋一哉
［1954］『業の研究』法藏館
［1987］『倶舍論の原典解明：業品』法藏館

水野弘元
［1997a］『仏教教理研究』2、春秋社
［1997b］『パーリ論書研究』3、春秋社
室寺義仁
［1985］『成業論:チベット訳校訂本』私家版：京都
［1986］「『倶舎論』・『成業論』・『縁起経釈』」『密教文化』156:82-53
森祖道
［1984］『パーリ仏教注釈文献の研究』山喜房仏書林
山口益
［1951］『世親の成業論：善慧戒の注釈による原典的解明』法蔵館
山口益・野澤靜證
［1953］『世親唯識の原典解明』法蔵館
結城令聞
［1986］『世親唯識の研究：上』青山書院
吉田哲
［2016］「ディグナーガによるサーンキャ知覚批判の特徴」『印度学仏教学研究』64-2: 939-933
劉婷婷
［2019］「色処の定義の変遷—形色の概念を中心に—」、『龍谷大学佛教學研究室年報』23 号、pp.69-93
渡邊楳雄
［1976a］『阿毘達磨集異門足論』国訳一切經・毘曇部 2、改訂版、大東出版社（初版 1929）
［1976b］『阿毘達磨法蘊足論』国訳一切經・毘曇部 3、改訂版、大東出版社（初版 1930）
［1976c］『阿毘達磨識身足論』国訳一切經・毘曇部 4、改訂版、大東出版社（初版 1931）
［1976d］『阿毘達磨品類足論』国訳一切經・毘曇部 5、改訂版、大東出版社（初版 1932）
［1976e］『舎利弗阿毘曇論』国訳一切經・毘曇部 19、改訂版、大東出版社（初版 1934）
渡邊楳雄・水野弘元・大石秀典
［1976］『雜阿毘曇心論』国訳一切經・毘曇部 20、改訂版、大東出版社（初版 1932）

〈キーワード〉アビダルマ、世親、衆賢、『順正理論』、色処、形色、身表業

（博士後期課程）